

# 「SATSUMA」って?

今回は、薩摩焼が「工芸」として認められた頃のエピソードをご紹介します。明治20年代まで、「工芸」は「工業」と混同されることが多々ありました。日本ではまだ機械工業が根づいておらず、どちらも手工業だったためです。

「工芸」の迷走ぶりは、明治10(1877)年の内国勸業博覧会において、書画の部に陶磁器や木製品が展示されたことでも窺えます。絵が描かれている物品は書画に位置付けられたのです。万国博覧会においても、例えば薩摩焼ははじめ工業部門に展示され、美術部門への展示が実現したのは明治26年のシカゴ万博のことでした。この間、明治政府は国産工芸品の「美術工芸」への格上げに尽力します。

明治11年のパリ万博の際、政府は日本陶磁器69件とフランスのセーブル焼「瑠璃地金彩人物図壺(一対)」(東京国立博物館蔵)を交換しました。69対1とは驚きですが、それほど欲したのは理由があったはず。この飾壺、全体を瑠璃地として金彩で飾り、胴に開けた窓にあかかも油絵のような絵が描かれています。濃いブルーの地色は「ブリュー・ド・ロワ(王の青)」と称され、当時世界的評価がありました。政府が考える手本がこの作品だったのではないのでしょうか。

その後、この意匠性に学んだ陶磁器が日本でも登場します。白色陶器に瑠璃や緑色の地に金彩を施し、胴の窓に近世風俗の日本女性や自然を絵画的に描いたもの。それらは、海外で「SATSUMA」と称され人気を博しました。しかしながら、それらの本場は京都。一方薩摩焼では、素地を塗り込めるデザインが定着した気配はありません。

薩摩焼に無縁の「SATSUMA」人気は些か穏やかではありませんが、作品は魅力に溢れています。その華麗な作例を3Fロビーに展示中です。ぜひご覧ください。

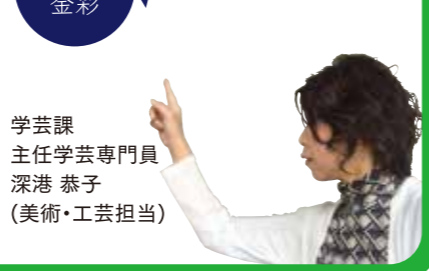


錦手花鳥婦人図花瓶 七代錦光山宗兵衛 京薩摩 19世紀後半

3階ロビーで展示中



瑠璃地金彩 錦手婦人図花瓶 京薩摩 19世紀後半



学芸課 主任学芸専門員 深港 恭子 (美術・工芸担当)

## 館長あいさつ

皆様、こんにちは  
風薫る新緑の頃を迎え、私ども黎明館が立地するここ城山ゾーンも、「鹿児島城跡」がもつ歴史的・文化的な魅力を直接肌で感じながら、楽しくウォーキングするには、絶好の季節となりました。

そのような「かごしま文化ゾーン」に立地する私ども黎明館は、明治百年を記念した事業の一環として昭和58年に開館し、以来、「夜明け」を意味する「黎明」という名に相応しい役割と機能を果たしていかなければ、との思いでこれまで種々取り組んできたところであります。

特に、幕末維新期を始め、鹿児島県のこれまでの史実の持つ実像とその意義を辿りながら、先人達の魂の遺産の息吹を次の世代に伝え繋いでいくこと、そして、新しい時代の紡ぎに幾ばくなりとも貢献していくことが、引き続き私ども黎明館の果たすべき重要な役割だと考えております。

そのため、皆様方の目線に立った、「分かりやすく・楽しく・親しんで」いただける施設として、一人でも多くの県内外の皆様方に、それぞれの視点や感性でそれぞれに感じ取って頂ける、そんな気付きや驚き、感動を伝えられるよう、これまでに、常設展示をリニューアルしたほか、昨年4月から「年間パスポート」の取扱も始めたところで。また、昨年3月には、「鶴丸城御楼門」の復元が完成するなど、私ども黎明館は、「社会教育の拠点」としてだけでなく「観光拠点」として役割も大いに期待されているところであります。

新型コロナウイルスの影響で、皆様方それぞれに大変厳しい毎日が続いていることと思いますが、こういう時だからこそ、黎明館としては、皆様方それぞれが少しでも心の安らぎを得られるよう、そして、それぞれご自身の未来を見つけ出して頂けるよう、今後とも様々なスタイルの情報発信に努めてまいります。



館長 酒匂 司

### 人事異動のお知らせ

転出者	氏名	転出先・職名
副館長(兼)総務課長	赤間 広嗣	退職

転入者等	氏名	元所属・職名
副館長(兼)総務課長	小村 浩信	鹿児島地域振興局総務企画部長
観光・文化スポーツ部文化振興課(兼)歴史・美術センター黎明館	平 美典	総務部文化スポーツ局文化振興課楼門等建設推進室(兼)歴史・美術センター黎明館
〔館内〕主査	小野 恭一	主事

## 黎明館のフカホリ①

### 敷地散策のススメ タノカンサア

黎明館の敷地内には、様々な文化財や記念碑が建立されており、自由に見学することができます。当館の屋外展示(無料)にある田の神像を中心に紹介します。



### 田の神像とは?

薩摩大隅、日向の諸県地方にまたがる旧薩摩藩領の地域に見られる石像で、一般に「タノカンサア(田の神様)」と呼ばれています。

18世紀初めに造立が始まり、19世紀初め頃まで盛んに造られました。

20世紀前半にも新たに多くの田の神像が造られています。豊作を願う人々の信仰を示す、貴重な文化財です。

田の神像は、造立された地域や時代、人々の信仰とともにその姿・形が発展して行きました。

## 黎明館 NEWS

### CHIN JUKAN POTTERY、初夏のオススメ

あたたかな陽気に、少しずつ初夏の足音が聞こえ始めた今日この頃。黎明館1階 Shop & Café CHIN JUKAN POTTERY 喫茶室では、冷たいドリンクがおいしい季節を迎えました。

この時期のおすすめは、珈琲フロート(税込605円)。なんともおしゃれな薩摩焼のゴブレットに注がれたアイスコーヒーと、バニラアイスの絶妙なハーモニーに、心躍る一品です。味もさることながら、見た目の可愛らしさにも注目です。

爽やかな風に吹かれながらドリンクを楽しみたいという方には、テイクアウトもおすすめ。鹿児島ならではのタンカンジュース(テイクアウト・税込378円)は、果実のうまみを存分に楽しめます。

CHIN JUKAN POTTERYでは、この他にも、冷たいドリンクを多数取りそろえています。散策のついでや、ホッと一息つきたいときに、ぜひ、ご利用ください。



かのや あいら かみみょうなかふくら 鹿屋市吾平町上名中福良の田の神像(模刻) 像高96cm

この田の神像は、僧の姿をしています。僧型は、仏像型から発展した型式で、薩摩半島の中央部と大隅半島の中央部に多く分布しています。シキと呼ばれる甑の底に敷くワラの敷簀(しきす)を頭にかぶり、手にはオデグワ(風呂鉞)を持っています。また、背中にはメシゲ(しゃもじ)をさしたワラツト(種籾を入れる藁袋)を背負っています。

さつませんだい おしろえ 薩摩川内市尾白江町の田の神像 像高77cm

この田の神像は、神職型で、頭に笠状のシキをかぶり、右手にメシゲを持っています。民家「樋の間二ツ家」の裏手にある、桐の木の下に展示しています。



あいら ひらまつふれた 始良市平松触田の田の神像(模刻) 像高89cm

この田の神像は、田の神舞を踊る神職の姿をしています。田の神舞神職型は、神像型から神職型を経て発展した型式と考えられており、薩摩・始良・日置の地域に多く分布しています。大きなシキをかぶり、右手にメシゲ、左手にワン(椀)を持っています。親しみやすい表情と躍動的な姿が特徴です。